

# 幕末にヤーコプ・グリムを訪問した日本人について

(Die japanischen Besucher zu Jacob Grimm in Berlin 1862)

野口芳子

## 1. 序 論

1862年7月19日から8月5日の間に2人か3人の日本人が、突然、ベルリンのグリム家を訪問した。<sup>1</sup>あまりの珍客にヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) は驚いたが、彼らとオランダ語で会話した。<sup>2</sup>日本人が遣欧使節団のメンバーであることは間違いない。しかし、一体誰がベルリンでヤーコプ・グリムを訪問したのか、詳細は不明である。グリム側の記録にはそのことが明記されているが、日本側の記録には何も書かれていない。ヤーコプがその時、訪問者からもらったという香箱と日本人の肖像写真2枚は紛失してしまい、<sup>3</sup>詳細は闇の中に埋没したままである。鎖国政策の下で攘夷運動が叫ばれていた頃に、グリム兄弟のことを知っていた日本人が、ヤーコプ (弟ヴィルヘルムは1859年に死亡) をわざわざ自宅に訪問したのである。オランダ語で会話をしたようだが、何について話したのかは不明だ。このことは、日本とドイツの文化交流史のうえでも、特筆すべきことである。一体、誰がどのような目的でヤーコプ・グリムを訪問したのか。そのことを明らかにするのが、この論文の目的である。

## 2. 遣欧使節団のメンバーとベルリン訪問までの日程

江戸時代末、日本がまだ鎖国政策をとっており、国内では幕府に対する不満が充満し、尊王攘夷運動が叫ばれていた頃、幕府は文久元年 (1861) 年、欧州に使節団を派遣することを決定する。米、英、仏、蘭、露の5ヶ国と結んだ修好通称条約に規定された江戸、大阪、兵庫、新潟の開

市開港の実施延期を交渉するためである。<sup>4</sup> 今回の訪問国は欧州の結盟6ヶ国、すなわち仏、英、蘭、獨、露、葡である。使節団の人選は老中安藤信正が行った。3人の特命全権公使は、正使に竹内保徳、副使に松平康尚、目付（監察）に京極高明が任命され、随員は組頭に柴田貞太郎、

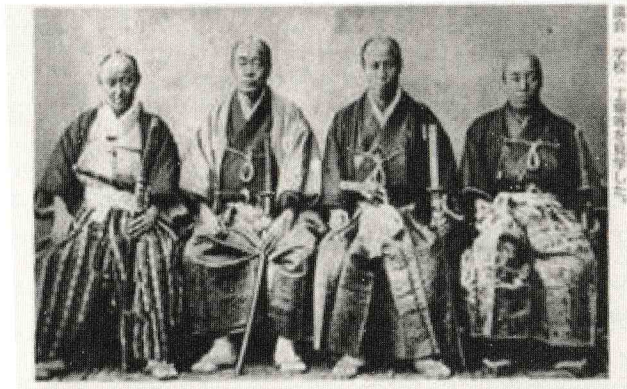


図1 松平康尚 (副使) 竹内保徳 (正使) 京極高明 (目付) 柴田貞太郎 (組頭)

勘定役に日高圭三郎、勘定格徒目付（監視）に福田作太郎、医師（漢方医）に高島裕啓、調役並（書翰係）に水品楽太郎と岡崎藤左衛門、普請役（進物取次係）に益頭 駿次郎、定役元もとに上田友輔、定役（恒例の公行事）に森鉢太郎、定訳並通詞に福地源一郎と立広作、同心（警備）に齋藤大之進、小人目付に高松彦三郎と山田八郎、通詞（唐通詞）に大田源三郎、備通詞に福沢諭吉、備翻訳方兼医師に松木弘安（寺島宗則）と箕作 秋坪、備医師（蘭方医）に川崎道民が任命された。<sup>5</sup> 団員は「外交交渉」と「事情探通弁」（西洋事情調査）という2種類の役割を果たす人員で構成されており、西洋事情調査団の一行に洋学派と言われる、福地、立、松木、箕作、福沢の5人がいた。福地と立は幕府直属の家来であるが、松木、箕作、福沢は直属の家来ではなく、大名の家来、いわゆる陪審であるので、一行中最末席に置かれ、何かと行動を監視された。<sup>6</sup>

一行は士官22名、召使11名、コック3名の合計36名に、英国公使館



図2 森鉢太郎、日高圭三郎、上田祐輔、柴田貞三郎、太田源三郎、福地源一郎、川崎道民、立広作

員マクドナルド（英国まで同行）を入れて37名の大所帯であった。<sup>7</sup> 1862年1月22日（旧暦1861年12月22日）、品川から出港した一行は、イギリス政府が用意した艦船に乗って、1月30日（旧暦1862年1月1日）に日本を離れ、4月7日にパリに到着する。パリではロテル・デュ・ルーブルに宿泊し、その広さと快適さに感激する。通詞の立広作（17歳）がフランス語を少し話したり読んだりできると、フランスの官報紙が伝えている。<sup>8</sup> 彼らはフランス政府が馬車を用意してくれたにもかかわらず、皇帝に謁見する4月13日まで外出を控えると宣言し、ホテル内に閉じこもっていると『ル・タン』（*Le Temps*）紙が報じている。<sup>9</sup>

4月15日、同心、齋藤大之進より「外出規則」が示され、「外出する者は前の晩に申し出、さらに翌日、もう一度許可を求める。外出は一日二回に分けられ、午前中は九時から十二時まで、午後は十二時から五時か六時まで」とある。<sup>10</sup> 皇帝謁見後、禁足が解かれると福沢（27歳、図3）は早速、病院見学に行く。おそらく箕作（37歳、図4）と松木（30歳、図5）の3人で訪れたのであろう。<sup>11</sup> 彼らはトンネル、橋、天文台などを見学し、19日に学





図3 福沢諭吉 1862年



図4 箕作秋坪 1862年



図5 松木弘安 1862年

校を訪問する。4月26日、フランスの新聞は松木弘安が、同僚2名を伴い、工芸書店を訪れ、繊維工業、博物学、工業化学、機械工学を選び、機械や建築の書物や図版集を熱心に見たと報じている。<sup>12</sup> フランス政府から日本学者レオン・ド・ロニー (Léon Louis Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914) が通訳として派遣され、一行の案内役を務めた (図6)。彼は頻繁にホテルに来て日本人と交わり、とくに福沢、箕作、松木ら蘭学の素養がある人々と親しく会談した。<sup>13</sup>

4月29日に一行はパリを去り、イギリスに渡る。4月30日にロンドンに着き、6月12日までに、病院、学校、電信会社、天文台、議会などを訪れる。<sup>14</sup> ロンドンとパリの両都市で、福沢は盲啞学校を訪れ、熱心に視察している。<sup>15</sup> 約1ヶ月半のロンドン滞在中、福沢は多くの英書を購入する。<sup>16</sup> 6月12日、一行はロンドンからオランダのアムステルダムに行き、ドーレン・ホテルに宿泊する。一行はダイヤモンド研磨工場、国立美術館、王宮、製鉄所、造船所、電報局、印刷所、砂糖精製所、盲啞学校、救貧院、孤児院、動物園、時計



図6 Leon L.L.P. de Rosny

店、ビール工場などを見学する。<sup>17</sup> 6月28日にアムステルダムを出発して翌日にハーグに到着し、7月1日に国王に謁見する。<sup>18</sup> ハーグでは癲呆院を、デフォルトでは兵器製造所を、ライデンでは大学を訪問する。7月6日に日本使節団の随員、松木、箕作、福沢、山田 (小目付) の4人がホフマン教授 (Johann Joseph Hoffmann, 1805-1878) の案内でライデン大学の物理陳列館を訪れる。<sup>19</sup> 7月9日に団員のうち3名がオランダ商事会社を訪ね、その後、ピンネン病院まで馬車で行く。「3人のうち2名は医師であった」とロッテルダム新聞が報じている。<sup>20</sup> この3名はおそらく福沢と松木と箕作であろう。

7月15日にハーグを出発して、17日にケルンに着く。18日にケルンを出発して、夕方にベルリンに到着する。ホテル・ブランデンブルク<sup>21</sup> に到着したその晩から、プロシア国王ヴィルヘルム I 世に謁見する21日まで外出を控える。<sup>22</sup> 陪審であり団員の中での序列が最下位であった福沢たちは、ベルリンでも国王拝謁の式には参列していない。<sup>23</sup>

25日に福沢たちはベルリン最大の病院、シャリテ (Charité) 病院を訪問する。7月26日には養正院に行き、その後監獄 (Zellengefängnis) に行く。4階建ての石造りの近代的な建物で、460人の囚人が大部屋ではなく、全員個室 (zelle) に収容されている。獄内に学校が5ヶ所あり、週2回囚人を教育する。普通学校と同じ内容を教えている。平日も囚人に書物を与え読書させる。獄内では囚人に手仕事をさせ、出所の際に給金としてまとまった金を与える。<sup>24</sup> プロシアのツェレン監獄は政府自慢の施設であり、三使も数日後にここを訪問する。

福沢は後に『西洋事情』で、「ヨーロッパで学問の1番盛んなのはプロシアである」と述べている。さらに獄舎にまで学校を設けているとして、監獄内に設けられた学校のことを詳しく紹介している。<sup>25</sup>

27日に老兵を養う家を訪れ、28日に製鉄所、29日にペン工場を見学し、精製作業と練磨作業では女性のみが作業していることに驚く。31日にベルリン大学を見学する。マグニウス教授 (Heinrich Gustav Magnus, 1802-1870) の案内で構内を巡り、教官200名、学生1000名と聞く (図7)。8月2日に国会議事堂に行く。8月5日に一行はベルリンを出発し、ロ





図7 Heinrich Gustav Magnus

シアに向かう。<sup>26</sup>

福沢が欧州巡回中に知りたかったことは、書籍では調べられないこと、外国人にとっては当たり前のことなので字引にも載っていないことである。例えば病院の治療費や入院費は、誰がどのように支払うのか、銀行の金の支出入はどうなっているのか、郵便法、徴兵令（フランス有り、イギリス無し）、選挙法とはどのようなものか、2大政党（保守党と民主党）とは何か、それが政治上の喧嘩をする議会とは何か、などを知ること

である。<sup>27</sup> 聾啞学校、養老院、救貧院、大学などを集中的に訪問したのも、その経営上の仕組みについて質問するためだったのである。社会改革を目指す実践的社会学者、福沢諭吉の誕生が予想できる選択といえる。

### 3. ヤーコブ・グリムを訪問した文久遣欧使節団員について

使節団の中の2人か3人がヤーコブ・グリムの家<sup>28</sup>を訪れて、彼とオランダ語で面談したという記録がドイツ側に残っているが、<sup>29</sup>それが誰であったのか、いまだに確認できていない。訪問した人数については2説ある。ひとつは、グリム兄弟の末弟ルートヴィヒ（・エミール）（Ludwig Emil Grimm, 1790-1863）が姪のアウグステ（Auguste Grimm, 1832-1919）に宛てた手紙（1862年10月10日）に基づいた説である。

僕が日本人の小箱もらったことに対して、すごく感謝していると、どうか兄さん（ヤーコブ）に伝えておくれ。みんなでさんざん小箱を眺め回し、臭いを嗅いでいる。これは家の宝だ。[……]ところで、ひとつお願いがある。日本の紳士たちの2枚の肖像写真について教えてほしい。この人たちは誰なのか。使節団の中でどのような役職についていた人なのか。ここに鉛筆でスケッチしたものを同封する。

下の赤でマークした枠の字の意味を教えてください。<sup>30</sup>



図8 Jacob Grimm (1870年頃)

ルートヴィヒのこの手紙に対するアウグステからの返信はなかった。この手紙には2枚の写真と記載されているので、訪問者は2名であろうというのが2名説の根拠である。<sup>31</sup> 一方、3名説の方は、ショーフ（Wilhelm Schoof, 1876-1910）の『ヤーコブ・グリム伝』（*Jacob Grimm. Aus seinem Leben*）に取められているドロテア・グリム（Dorothea Grimm, 1793-1867）の手紙に基づいたものだ。ヴィルヘルムの妻ドロテアは、姪のルイーゼ・ブラートフィッシュに宛てた手紙（1864年12月13日）に、「3人の日本人が私たちを訪問した。私とグストヒェン（ヴィルヘルムの娘アウグステの愛称）とヤーコブはそれをとても喜んだ」と書いている。<sup>32</sup> 2名説は渡された肖像写真が2枚であるから、訪問したのは2名であると結論づけているが、この説は論理的に欠陥がある。訪問者が全員自分の写真を相手に渡すとは限らないということと、肖像写真は1名ではなく、2名あるいは3名一緒のものであったと考えることもできるからである。一方、3名説は当時ヤーコブと一緒に住んでいたドロテアの手紙に基づいたものだ。彼女は「3人の日本人が私たちを訪問した」と、日本人訪問客の数を3人と明記している。当然、後者の3名説の方が正しいと言わざるを得ない。

オランダ語で会話したというヤーコブの記録から、翻訳方兼医師として使節団に加わっていた箕作秋坪、松木弘安、福地源一郎、立広作、福沢諭吉、森山多吉郎（英国より団員に加わった通詞代表）の6人が考えられる。<sup>33</sup> 使節団には2つの任務が課されていて、団員の選別はその任務により行われていた。第1は西洋諸国に対する開港開市延期談判要員であり、第2は西洋諸国の事情探索要員である。<sup>34</sup> 松木、福沢、箕作は第2の要員として、福地と立は第1の要員として派遣されているのである。<sup>35</sup> 旅の主目的は外交事項なので第1要員が重視されていたが、外国



語を操り探索と称して自由に行動できたのは第2要員の方であった。

福沢は「医師と文人」グループに所属し、<sup>36</sup>番所調所<sup>37</sup>以来の親友である箕作や松木たちと行動を共にしていた。「秋坪、福沢、松木は年来の学友で、同志同感の間柄で、なんでもあらん限りの物を見ようと」していたので、「公儀の役人連からは警戒され」、訪問先には必ず、「御目付方の下役」を伴うよう定められた。<sup>38</sup>3人とも陪臣（大名の家来）で、しかも洋書が読めるので警戒されたのだ。監視人の都合が悪いと外出もできないという状況を理不尽だと思った3人は、「外国にいながらとかく外国人に会うことをやめようとする」のは、「日本の鎖国をそのままかついできて、ヨーロッパ各国を巡回するようなものだ」と言って、<sup>39</sup>憤っている。ホフマン教授の案内でライデン大学を見学したときも、小目付の山田八郎が監視人として同行したが、彼らはそのことを苦々しく思っていたのだ。

福沢の『西航記』は、文久遣欧使節団員の日記であるが、そこには空欄が多く、記述を削除して作り直したと思われる箇所が散見する。<sup>40</sup>1862年7月31日（旧暦7月5日）福沢、箕作、松木の3人はベルリン大学を訪問し、案内役のマグニウス教授に様々な質問を投げかける。日独



図9 ベルリン・フンボルト大学

文化交流に詳しい田中梅吉も大学訪問の日にヤーコプを訪問したと推測しているが、<sup>41</sup>その可能性は高いと思われる。

ベルリン大学からヤーコプ・グリムの家（Linkstraße 7）まではウンター・デア・リンデン（Unter der Linden）通りを通って、約2キロメートルの距離である。滞在中の移動は原則として馬車を使ったと書かれているが、<sup>42</sup>歩いても30分くらいの距離である。三使は午後、「失火消防局」を訪れて訓練を見て、夜7時には観劇に行く。通詞の福地源一郎は劇の概要を聞きに行つて、それを三使に伝える仕事があり、<sup>43</sup>通詞代表の森山多吉郎も三使に同行すると思われるので、ヤーコプ宅訪問は無理と思われる。福地は森山の愛弟子であるので、森山と一緒に三使と行動を共にすることが多かった。この日の可能性が高いのは、大学訪問の際、マグニウス教授から学校制度や国語に関しては、ヤーコプ・グリムが詳しいと聞いたからではないだろうか。なぜなら、ヤーコプは1849年に「学校、総合大学、単科大学について」（Über Schule, Universität, Akademie）という題で講演し、論文も書いているからだ。<sup>44</sup>すでに述べたように、外国人を訪問する場合、団員は前日から許可を取っておかなければならない。許可なく外国人を訪問するのは固く禁じられていた。ライデン大学のときは監視人の山田を伴ったが、今回は監視人抜きで、事前の許可申請もせず、3人単独でヤーコプ・グリムを訪問したと思われる。この訪問に関して、記録している人が誰もいないということは、記録すると都合の悪い行為、つまり規則違反の行為であったからであろう。

すでに述べたように、福沢がこの旅行で重点的に訪問したのは、病院と学校である。福沢は緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、さらに番所調所で教えていた。そこでの友人である箕作秋坪と松木弘安が医者兼翻訳方として同行しているので、彼らは常に3人組になって行動していたのである。

日記が空欄になっている翌8月1日、3日、4日（旧暦7月6日、8日、9日）の間に、<sup>45</sup>彼らがヤーコプ・グリムを訪問した可能性も否定できない。その時も、監視役を伴わない単独行動であったのであろう。3人の日記には何も記載されていないので、訪問したのは彼らではないという論理<sup>46</sup>ではなく、彼らであったが、規則違反の行為なので、書くと都合



が悪かったと考える方が、攘夷運動が叫ばれていた幕末の状況から判断すると妥当ではないだろうか。

福沢たち随行者がベルリンで写真を撮ったのは7月24日である。ヤーコプを訪れたとき、彼らは2枚の写真を渡したそうだが、<sup>47</sup> その写真がグリム家の方で紛失しているので、誰であったのかは不明だ。ただし、ヤーコプはその写真を画家である弟ルートヴィヒに送り、肖像画を書くように依頼しているので、日本人の肖像写真であったことだけは確かだ。訪問者はおそらく自分たちの写真を渡したのであろう。確実な証拠はないが、この訪問者は、おそらく福沢諭吉(27歳)、箕作秀平(37歳)、松木弘安(寺島宗則30歳)の3人であろう。なぜなら、ヤーコプ・グリムを訪問した3人のうち2人は、その後学校を設立しているし、彼らの親族または教え子の多くが、グリム童話の初期の翻訳者になっているからである。

福沢は慶應義塾、箕作は三叉舎(現、専修大学)を設立している。彼らがヤーコプを訪問したのは、おそらく学校制度の詳細について聞くためだったのだろう。これからの日本にとって必要なのは学校教育であると考えていた福沢たちは、規則を犯してでも専門家の意見を聞いたかったのであろう。

童話集の編者というより、<sup>たみ</sup>民の法である慣習法や法律故事に明るい法学者であり、「言語と国」の関係を重視する言語学者でもあるヤーコプ・グリムは、日本国民全体が意思疎通を図れる共通言語「標準語」の創出を模索する幕末の知識人にとって、学ぶべきものを多く秘めた学者であった。「学校、総合大学、単科大学について」の論文でヤーコプは、ドイツは政治的にはフランスやイギリスに劣るが、学問(Wissenschaft)がドイツ民族(Volk)の内なる力を掻き立て、高めてくれた。<sup>48</sup> それゆえ、学問分野ではこの2国を凌駕していると断言している。<sup>49</sup>

『西洋事情』で福沢が「欧羅巴にて文学の盛んなるは普魯士を以て第一となす」とプロシアの学界を最も高く評価しているのは、<sup>50</sup> ヤーコプからの情報に裏打ちされたものではないだろうか。福沢は「近代文明の元素」を「蒸気船車、電信、印刷、郵便の四者」であるとし、<sup>51</sup> それら

の力によって「インフォメーション」、すなわち「智」を得ることが教育であるという。<sup>52</sup> そして智を「記憶する能力」、「推理する能力」、「想像する能力」を身に着けさせるのが「文明教育」であると説く。<sup>53</sup> 上記4つの発明が、情報を得る手段として重要な役割を果たしたからこそ、近代文明が発達したというのである。文明をこのように理解しているからこそ、日本の近代化に必要なのは、教育であるという結論に達したのであろう。「昔ナポレオンあり、今ビスマルクあり」<sup>54</sup> と両者を高く評価しながら、今はドイツの時代であると、教育に力を入れていたプロシアが普仏戦争でフランスに、ナポレオンに勝ったことに注目しているのである。

ヤーコプは前述の論文で、当時(1849年)プロシアには人口1500万人中、3万人の先生(Schulmeister)、つまり人口500人に1人の先生がおり、平均50人の生徒を教えているが、これは他国と比較して異常に高い数値であると述べている。<sup>55</sup> そしてその教育の基礎が言語であるとするヤーコプは、「民族とは同じ言語を話す人」(Ein Volk ist der Inbegriff der Menschen, welche dieselbe Sprache reden)<sup>56</sup> であると定義している。国家創出に当たって国民が共有できる平易な標準語を模索する知識人にとって、言語の歴史を研究して「グリムの法則」を打ち立て、『ドイツ語辞典』を編纂して国語に貢献し、さらに初等教育や大学教育についての見解を発表していたヤーコプは、ドイツの文化政策に重要な役割を果たした人物と認識されていたのであろう。<sup>57</sup> 彼が収集した昔話『子どもと家庭のメルヘン集』(通称、『グリム童話集』)が、方言ではなく主として標準ドイツ語で書かれているのは、ドイツ語を使用するすべての人々が意思疎通できる言語「標準ドイツ語」を広く人々に普及させ、諸侯に分断されているドイツ人の結束を促し、ドイツ人としてのアイデンティティを確立させたかったからなのである。

そのうえヤーコプは日本文化や日本の裁判にも興味を持ち、『ドイツ法律故事誌』(Deutsche Rechtsaltertümer, 1828)で「日本人は火審や潔白の飲み物による審判を知っている」(Die Japaner kennen die feuerprobe und den unschuldstrank)<sup>58</sup> と述べているのである。日本の火審とはおそらく「探湯」(くかたち)の



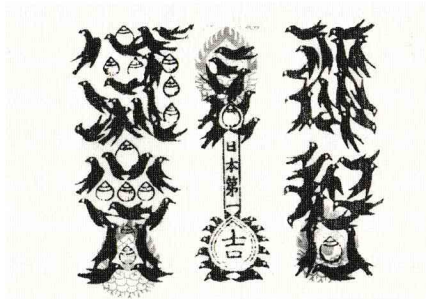


図10 熊野牛王神符 ①熊野那智大社発行

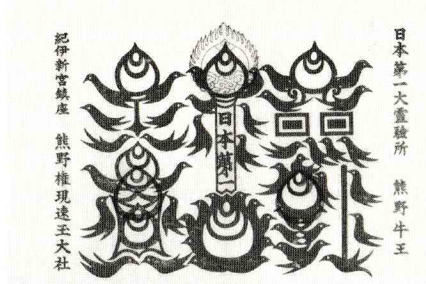


図11 ②熊野速玉大社発行

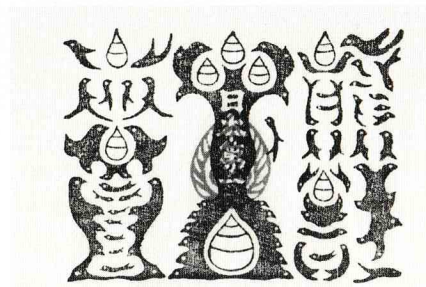


図12 ③熊野本宮大社発行

ことで、熱湯や熱した鉄に手がただれなければ無罪とする審判であり、潔白の飲み物とは、熊野牛王という護符を細かく切って水に混ぜて飲ませることによって罪の有無を判断する方法である。それを飲むと、罪人は苦しくなり白状するが、潔白な人はなんともないという。<sup>59</sup> 熊野牛王とはカラス文字で書かれた護符で、熊野三山で発行されたものである。最古のものが那智大社牛王（初出1266年、図10）で、熊野速玉大社牛王（1520年、図11）、熊野本宮大社牛王（1618年、図12）と続く。<sup>60</sup> 牛王神符は単なる祈りの護符ではなく、起請文に用いられる誓いの護符でもあった。<sup>61</sup> 熊野権現の使いである八咫鳥の姿が描かれた神符の裏に誓約文を書いて契約を取り交わす。裏切るとカラスに裁かれる。つまり、近代以前の日本では契約破棄を裁くのは法ではなく、神格化されたカラスだったのである。

#### 4. ヤーコプを訪問した日本人とグリム童話翻訳の関係

福沢諭吉の門下生である菅了法は、1887年4月に最初のグリム童話選集本（11話紹介）を『西洋古事神仙叢話』という題名で英訳本から重訳して紹介している。<sup>62</sup> それ以前、すでに1873年に、学校で使う英語教科書 *Sargent's Standard Third Reader* に掲載されている 'The Horse-Shoe Nail'（グリム童話184番「釘」）が、松山棟庵が出した英語教科書の訳本『サンゼルト氏第三リイドル』の中で、「鉄沓の釘の事」という題で邦訳されており、<sup>63</sup> さらに深間内基も同年、『啓蒙修身録』で同じ話を「人の忠告を用いずして損せし事」という題で邦訳している。

グリム童話「釘」は、蹄鉄の釘が1本抜けたまま馬を走らせ、馬を死なせてしまう商人の話を紹介したものである。これは17世紀から存在が確認されている西洋の格言で、蹄鉄の釘の手入れを怠ったせいで、馬が死に、軍が負け、戦争に負けたという教訓話である。<sup>64</sup> この話はベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-1790）が出版したカレンダーによって、アメリカ全土に普及し、国を富ませ、軍隊を強くするために必要な知恵を伝授するものとして重視されていく。<sup>65</sup> 「富国強兵」の名のもとに文明開化政策を断行していた日本政府にとって、この格言は日本が西洋から学ぼうとしていたものを端的に提示した理想的教材といえよう。

訳者、松山棟庵は蘭学を学び、福沢諭吉と共に1878年に慶應義塾医学所を開設して、初代校長に就任した人物であり、福沢の主治医として生涯福沢と親交を深めた人である。深間内基も慶應義塾で学んだ福沢の門下生で、ミルの『女性解放』を訳して『男女平等論』として発表した人である。このように日本で最初に紹介されたグリム童話は、いずれも福沢の門下生および福沢と親交を結ぶ人々によって、英訳本からの重訳という形で出版され、「富国強兵」政策を推進するのに必要な西洋の道徳を伝える働きをしたのである。

最初の絵本『ハツ山羊』を1887年9月に訳した統計学者呉文聰は、箕作秋坪の姉、せきの長男である。せきの末子呉秀三は、<sup>66</sup> 東大の精



神医学科教授であり、彼が巢鴨病院で指導した医師井村忠介は、第一高等中学校時代にグリム童話 KHM18「藁と炭とそら豆」を『RŌMAJI ZASSHI』（1887年6月）にローマ字で訳している。呉文聰と井村忠介の訳は、<sup>67</sup> いずれも英訳からの重訳ではなく、ドイツ語からの直訳である可能性が高い。

箕作秋坪とグリム童話の関係はかなり深いものがある。文久遣欧使節団員として秋坪が渡欧したとき、購入したと思われるグリム童話の本に、姉せきは触れていたのではないだろうか。せきの息子が2人とも、グリム童話の邦訳に関わることになるのは、単なる偶然ではないと思われる。文聰と箕作家との関係はかなり濃厚で、文聰は母方の実家である箕作家の人々とは、親しく付き合っていた。無鉄砲に外国に行こうとしたときや心配事があるごとに、箕作家の人々に相談に乗ってもらっていたのである。<sup>68</sup>

ヤーコプ・グリムを訪ねた福沢諭吉と箕作秋坪は、訪問の事実を書けないからこそ、グリム兄弟の著書の翻訳を促すという形で、ヤーコプの好意に報いたのではないだろうか。

呉秀三は医者であるが、「生来文学、歴史を好み、また名文家としても知られていた」<sup>69</sup>という。彼が学生時代に書いた『精神啓蒙』（1889）は優れた作品であり、斎藤茂吉が一高生の時読んで感動したそうだ。<sup>70</sup> 呉秀三は文学愛好者だったのである。呉秀三は上田万年と同じ時期に帝大の大学院生であった。このころは大学院生が全学部で50人弱しかおらず、文学好きの呉秀三は、兄文聰と上田万年とが、同じグリム童話「狼と7匹の子山羊」を訳していることから、上田万年とも親交があったのではないだろうか。

ヤーコプを訪ねたであろう3人目の人物、松木弘安は薩摩藩の船奉行として英国に2隻の船を渡すとき、火薬庫に火を放ち2隻を焼失させ、本人は英国船に身を投じて捕虜となった。その後、薩摩藩に戻され、1865年に薩摩藩派遣使節団の団長（出水泉蔵と改名）として再び欧州に行き、薩摩藩留学生をロンドン大学で学ばせている。<sup>71</sup> 帰国後1866年7月、彼はまた改名し、寺島陶蔵と名乗る。<sup>72</sup> 明治維新後、彼は政府に取り立

てられ外交官となり、手腕を発揮する。<sup>73</sup> 1872年には寺島は初代の英国公使に任じられ、英国駐在を命じられる。<sup>74</sup> 英国に滞在している間、公務に忙殺されていたようだが、彼が英国で英訳本のグリム童話を購入し、日本に持ち帰った可能性も考えられなくはない。さらに1882年7月、寺島は特命全権公使として米国に赴任する。そして国会に関する数多くの書物をワシントンから西周に送っている。<sup>75</sup> 知人に送った英書のなかに、グリム童話の英訳本が含まれていた可能性も皆無ではない。

文久の遣欧使節団として欧州各地を訪問した松木（寺島）は、「欧州で最も建物が美しい町はベルリンである、町の規模と文化度が最も高いのはロンドンとパリだが、街並みの美しさではベルリンが上である」と述べている。<sup>76</sup> その美しいベルリンで彼が、ヤーコプを訪ねたかどうかについては、何も書かれていない。福沢同様、記録すべきことではないと判断したからであろう。3人の中で、最も写真に詳しいのは、松木弘安である。彼は薩摩藩主島津斉彬のもとで、電信機だけでなく、写真機の製造にもかかわっていた。<sup>77</sup> 1859年、28歳のときに蘭語だけでなく、英語とフランス語も修学していた松木には、<sup>78</sup> 数多くの言語に通じているヤーコプ・グリムとの面談は、心踊るものがあつたであろう。その想い出が彼の中でどのように生き続けたのか、確認できないのが残念である。

なお、遣欧使節団員の中にはグリム童話と関連を持つ人物がもう1人存在する。通詞の福地源一郎（福地桜痴）である。彼はグリム童話 KHM44「死神の名付け親」と関連を持つ。この話は日本では落語「死神」として流布しているが、それは三遊亭圓朝が明治20年代に作ったものだそうだ。<sup>79</sup> 出典はイタリアオペラ『クリスピーノと代母』だと言われているが、グリム童話との関連も無視できない。福地が慶応遣欧使節団員として2回目の渡欧をした1885年は、パリではリッチ兄弟のオペラ『クリスピーノと代母』が初演され、大当たりした年であった。<sup>80</sup> 福地はその上演を見た可能性があるというのだ。<sup>81</sup> そうだとすると、福地はイタリアオペラの「死神」を圓朝に語ったことになるが、話の内容上の共通点からグリム童話から採ったと判断すべきだという説も存在する。<sup>82</sup> 圓朝は福地桜痴と親密な間柄だったので、<sup>83</sup> グリム童話「死神」の話も福



地から聞いていたのかもしれない。なぜなら当時、この話は日本語には訳されていないが、英語版には訳されていたからである。<sup>84</sup>

福地源一郎(21歳)は文久の使節団では最年少通詞としてオペラの概要を事前に抄訳して三使に伝える仕事を任されており、<sup>85</sup> 英国から団員に加わった通詞代表の森山多吉郎の愛弟子でもあった。彼は森山に伴って三使と行動を共にすることが多かった。そのうえ彼は上記の第1の要員として派遣されていたので、三使がポツダム王宮訪問や外務大臣を訪問したときは、<sup>86</sup> それに同行せねばならず、自由行動はとりにくい環境にあった。そう考えると、福地源一郎がヤーコプを訪問した可能性は低いと判断せざるを得ない。

## 5. 結論

ヤーコプを訪ねた日本人については2人説と3人説が存在するが、<sup>87</sup> ヤーコプ宅で実際に日本人客を出迎えたドロテアの言葉を尊重すべきであろう。日本人客は3人だったのだ。事情探索要員であった福沢たち3人は、各地の新聞で常に3人組で行動していたと報じられており、福沢自身も3人組になって行動したと書いている。ヤーコプ訪問時もおそらく3人一緒だったのであろう。そうだとすると、訪問客は福沢、箕作、松木の3人である可能性が高い。実際、この3人と親戚関係や師弟関係にある人々が中心になって、その後、グリム童話の邦訳を世に送り出している。著名な学者ヤーコプ・グリムを訪ねてオランダ語で面談した事実は、事前の届け出がない行為、規則違反の単独行動であったがゆえに、彼らの旅日記には一切記録されていない。しかし、それゆえ、貴重な思い出として終生彼らの心の中に残り、文明に必要な要素は民の教育であるというヤーコプの学説を实践するかのごとく、一方では学校を創立し、もう一方ではグリム兄弟の業績を日本人に知らせようと、弟子や親戚に働きかけ、グリム童話邦訳に尽力したのではないだろうか。

寺島宗則と改名して初代英国公使になった松木弘安も、プロシアは「諸学術は欧羅巴中第二には下り申さず、且病院其外所々の結構、人を驚か

し候」(1862年8月21日ペテルブルグ発書簡)と、<sup>88</sup> 日本宛の手紙に書き、教育と医療水準の高さではドイツは群を抜いていると評価している。松木はフランスの日本学者レオン・ド・ロニーと最も親交を深めた人物で、滞欧中2人は頻りに文通している。<sup>89</sup> ロニーの主催する「民俗学会」(Société d' Ethnographie)にも松木は日本人として初めて入会している。<sup>90</sup> 彼は「近代の発明発見を明かしてくれるいっさいのもの」とは何かを探り続け、近代文明を支えている根底のものを見極めようとしていた。<sup>91</sup> おそらくそれは、民の教育であろうという結論に達したのではないだろうか。英国や米国の大使を歴任してから、文部大臣も務めた松木(寺島)は国の教育行政に携わる仕事をしている。教育水準の高い民族が文明を支配すると考えたとすれば、教育に力を入れているプロシアの存在と、統一国家創出に必要な要素は共通言語と民の教育であると説くヤーコプ・グリムの存在が、おのずとクローズアップされてくる。民俗学という学問分野の確立に大きく寄与したグリム兄弟の存在を、同じ民俗学者であるロニーは熟知していたはずだ。松木がロニーを通じて得た情報により、ヤーコプ・グリムとの面談が急遽設定された可能性も否定できない。そうすると、福沢ではなく、松木の提案で、グリム宅訪問は断行されたことになる。

江戸時代に、ヤーコプ・グリムを訪問した3人の日本人は、公の承認を得ない私的な行動、つまり、禁止されていた行動であったがゆえに、ヤーコプとの面談記録は何も残していない。しかし、彼らはその後の行動において、「教育」の大切さ、それも民の教育の大切さを痛感して、西洋の昔話(Märchen)を翻訳して、人々に知らせようとしたのではないだろうか。

民話のなかに「民の詩心」(Volks poesie)があり、慣習法が秘められていると信じるグリム兄弟にとって、そのメルヒェン集は西洋の民の「智」が集積されたものなのである。それを翻訳して日本人に紹介することによって、福沢たちは上層階層ではなく、西洋の民の「智」を習得した民による文明開化を志そうとしたのであろう。近代文明を築くのに必要なことは、「民の教育」であると確信し、一生を教育に捧げた福沢論吉



や箕作秋坪の生涯は、民の文化を掘り起こし尊重することを説き続けた  
ヤーコプ・グリムの生涯と、どこか通底するものがあるように思える。

附記 この論文は日本昔話学会編「昔話一研究と資料」44号（2016年）に掲載  
された拙論に少し手を加えたものである。

注

- 1 Hennig, Dieter, Die Japanesen in Berlin. *Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft*. Kassel, Brüder Grimm-Gesellschaft 1991, Bd1. S.125.
- 2 Grimm, Jacob, *Kleinere Schriften*. Bd.1, Hildesheim Zürich New York, Olms-Weidemann 1991, S.186.
- 3 Hennig, Dieter a.a.O., S.125.
- 4 宮永孝『幕末遣欧使節団』（講談社、2006年）14-15頁。
- 5 同、15-16、20-27頁。福沢諭吉『副翁自伝』（白鳳社1970年）123頁。治部丸憲三『箕作秋坪とその周辺』（箕作秋坪伝記刊行会、1970年）70-73頁。石黒敬章『幕末明治の肖像写真』（角川学芸出版、2009年）35頁。
- 6 福沢諭吉『福翁自伝』（白鳳社、1970年）123-124、127頁。
- 7 宮永孝、前掲書、20-25頁。途中から森山多吉郎と淵辺徳蔵が加わり派遣された日本人の総数は38名になる。
- 8 宮永孝、前掲書、80-81頁。
- 9 同上、83頁。
- 10 同上、87頁。
- 11 同上、88頁。
- 12 同上、100頁。
- 13 同上、89-90頁。
- 14 同上、108-109頁。
- 15 同上、114-115頁。
- 16 福沢諭吉、前掲書、123頁。
- 17 宮永孝、前掲書、181-194頁。
- 18 同上、196頁。
- 19 同上、204-205頁。
- 20 同上、204頁。
- 21 Charlottenstraße 71にあったHotel Brandenburgは一流ホテルであったが、第二次世界大戦で焼失して、現在は残っていない。同上、223-224頁。
- 22 福沢諭吉「西航記」（『福沢諭吉全集』19巻、岩波書店、1962年）38-39頁。
- 23 山口一夫『福沢諭吉の西航巡歴』（福沢諭吉協会、1980年）222頁。
- 24 同上、231頁。
- 25 同上、231-232頁。

- 26 福沢諭吉「西航記」、前掲書、39-41頁。
- 27 福沢諭吉『福翁自伝』、前掲書、129-130頁。
- 28 ヤーコプ・グリムが当時ベルリンで住んでいた家はLinkstraße 7にあり、現在Sony CenterがあるPotsdamer Platzの近くである。
- 29 Grimm, Jacob, *Kleinere Schriften*. Bd.1, (2.Auflage 1879) Hildesheim, Zürich, New York: Olms-Weidemann 1991, S.186.
- 30 Ludwig Emil, Grimm an Auguste Grimm. Kassel 1810-1811.1862 In: Grimm, Ludwig Emil, *Briefe*. Hrsg. v. Egbert Koolmann. Marburg, Elwert 1985, Bd.1, S. 484.
- 31 Ebd. S.484.
- 32 Schoof, Wilhelm, *Jacob Grimm. Aus seinem Leben*. Bonn, Dümmler 1960, S. 401
- 33 宮永孝、前掲書、7頁。
- 34 ザビエル渡来450周年記念シンポジウム委員会編『薩摩と西洋文明——ザビエルそして洋学・留学生』（南方新社、2000年）65頁。
- 35 同上。
- 36 治部丸憲三「箕作秋坪素描」（『作陽音楽大学・作陽短期大学研究紀要』第12巻1号、1979年）70頁。
- 37 江戸末期、幕府が設けた洋学の研究・教育施設。外交文書の翻訳をも行った。安政2（1855）年に設置され、後に開成所と変更され、東京大学の前身校のひとつとなる。松村明『大辞林』（三省堂、1988年）1997頁。
- 38 治部丸憲三、前掲書、70頁。
- 39 福沢諭吉『福翁自伝』、前掲書、127-128頁。
- 40 福沢諭吉「西航記」、前掲書、7頁。
- 41 田中梅吉『日獨言語文化交流史大年表』（三修社、1968年）434頁。
- 42 「いつも外出には馬車に乗って出かけた。その内4～5度ぐらい歩行したことがある」と松木（寺島）が書いている。高橋善七『日本電気電信の父 寺島宗則』（国書刊行会、1989年）84頁。
- 43 英国で観劇中に日本人が居眠りするの、接待の英国人が、福地に劇の概要を調べて、事前に三使に伝えるよう要請した。その後、毎回観劇の時、彼は劇の概要聞きに行き、三使に伝えたそうだ。西本晃二『落語「死神」の世界』（青蛙社、1996年）229-230頁。
- 44 Hennig, Dieter a.a.O., S. 147.
- 45 福沢諭吉「西航記」、前掲書、40-41頁。
- 46 橋本孝『グリム兄弟とその時代』（パロル社、2000年）348-349頁。
- 47 Hennig, Dieter a.a.O., S. 125.
- 48 Grimm, Jacob, *Über Schule, Universität, Akademie. Reden und Abhandlungen*. Paderborn, 2011 (1.Aufl.1879), S. 214.
- 49 Ebd. S. 214.
- 50 山口一夫『福沢諭吉の西航巡歴』、前掲書、216頁。
- 51 福沢諭吉「民情一新」（『福沢諭吉全集』5巻、岩波書店、1959年）11頁。
- 52 同上、26頁。
- 53 福沢諭吉「文明教育論」（『福沢諭吉全集』第12巻、岩波書店、1960年）221頁。



- 54 福沢諭吉「東洋にビスマークなしと云うこと勿れ」(『福沢諭吉全集』9巻、岩波書店、1960年)449頁。
- 55 Grimm, Jacob, *Über Schule*, Universität, Akademie. a.a.O., S. 229.
- 56 Grimm, Jacob, *Verhandlungen der Germanisten zu Frankfurt am Main am 24. 25. und 26. September 1846*. Frankfurt am Main, Sauerländer 1886, S. 19.
- 57 西本晃二『落語「死神」の世界』(青蛙社、1996年)236頁。
- 58 Kämpfer, Engelbert, Buch 3. Cap.5. In: Grimm, Jacob, *Deutsche Rechartaltertümer*. Göttingen, Dieterichs 1828, S. 937.
- 59 堅田剛『ヤーコプ・グリムとその時代——「三月前期」の法思想』(御茶の水書房、2009年)197頁。
- 60 3種類の熊野牛王については下記の図10～図12を参照。嶋津宣史「熊野牛王宝印」町田市立博物館編『牛王宝印——祈りと誓いの呪符』(町田市立博物館、1991年)261-262頁。
- 61 同上、260頁。
- 62 詳細は右記参照。拙著「英訳本から重訳された日本のグリム童話」(『児童文学翻訳作品総覧』第4巻、ナダ出版センター、2005年)465-485頁。拙著「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」(大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版、2015年)220-230頁。
- 63 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」(『文学』9巻4号、2008年)140-151頁。拙著「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」(大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版、2015年)212-214頁。
- 64 *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, edited by Iona and Peter Opie. Oxford 1951, S. 324-325. 拙著「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」前掲書、212-217頁。
- 65 Franklin, Benjamin, *Poor Richard's Almanacks*. Philadelphia. 1976, S. 280
- 66 呉博士伝記編纂会『呉秀三小伝』(創造出版、2001年)13-15頁。
- 67 井村忠介については次の拙論を参照。野口芳子「『RŌMAJI ZASSI』に邦訳されたグリム童話について」(『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)』63号、2015年)13-15頁。
- 68 呉健編『呉文聰』(杏林舎、1920年)60-62頁。
- 69 東京大学精神医学教室120年編集委員会編『東京大学精神医学教室120年』(新興医学出版、2007年)49頁。
- 70 同上。
- 71 高橋善七、前掲書、108-111頁。
- 72 同上、114頁。
- 73 福沢諭吉『福翁自伝』前掲書、142-147頁。
- 74 高橋善七、前掲書、172-173頁。
- 75 同上、254-255頁。
- 76 同上、79-82頁。
- 77 同上、63頁。
- 78 同上、301頁。

- 79 麻生芳伸『落語百銭 秋』(筑摩書房、1999年)384-399頁。
- 80 西本晃二『落語「死神」の世界』(青蛙社、1996年)236頁。
- 81 同上。
- 82 梅内幸信『「死神」モチーフ再考:「死神の名付け親」(KHM44)と古典落語『死神』との比較考察』(鹿児島大学「地域政策科学研究」8巻、2011年)8頁。
- 83 西本晃二、前掲書、231頁。
- 84 「死神」を含む初期の英訳本はMartin Suttonによると4冊ある。Thoms, William J., *Lays & Legends of Germany* (1834), *Household Stories* (Addey ed. 1853), *Household Stories* (Bogue ed.1857), Hund, Margaret, *Grimm's Household Tales* (1884). Martin, Sutton, *The Sin-Complex*. Kassel, Brüder Grimm-Gesellschaft 1996, S. 311, 316.
- 85 西本晃二、前掲書、229頁。
- 86 同上、241-242頁。
- 87 ヤーコプ・グリムを訪ねた人数については2人説と3人説が存在する。ドルとヒエンの手紙では3人と書かれているが、ルートヴィヒの手紙では2人とされている。橋本孝『グリム兄弟とその時代』(パロル社、2000年)348頁。
- 88 治部丸憲三「箕作秋坪素描」前掲書、103頁。
- 89 現在でも松木がロニー宛てに出した手紙が10通以上残っている。犬塚孝明『寺島宗則』(吉川弘文館、1990年)67頁。
- 90 同上、69頁。
- 91 同上、68頁。

#### 図版出典

- 図1 First Japanese Embassy to Europe in 1862. Photograph by Nadar. <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:FirstJapaneseMission1862.JPG?uselang=ja>
- 図2 文久遣欧使節団の一部、「感性の時代屋」<http://guchini.exblog.jp/d2014-09-05/>
- 図3 慶応義塾編『福沢諭吉全集』第4巻、岩波書店1959年、国立国会図書館所蔵。
- 図4 箕作秀平「幕末ガイド」より<http://bakumatsu.org/men/view/223>
- 図5 松木弘安(寺島宗則)フォトレスキュー写助<http://www.sakai.zaq.ne.jp/duchv307/terasimamunenori.html>
- 図6 レオン・ド・ロニー(Léon de Rosny)36歳「イリュストラション」1873年10月18日号「日本の幕末と福澤」ロニーと福澤[http://www12.plala.or.jp/diapason/mu\\_mo\\_-\\_ri\\_bentofuransu/ronito\\_fu\\_ze.html](http://www12.plala.or.jp/diapason/mu_mo_-_ri_bentofuransu/ronito_fu_ze.html)
- 図7 グスタフ・マグヌス(Heinrich Gustav Magnus)、案内した当時は60歳の物理学教授。<https://en.wikipedia.org/wiki/>
- 図8 Jacob Grimm stirbt am 20. September 1863 in Berlin. Bildarchiv der Brüder Grimm-Gesellschaft・www.grimms.de
- 図9 ベルリン・フンボルト大学 2012年8月29日、野口芳子撮影。
- 図10～図12 熊野牛王3種類。①熊野那智大社発行、②熊野速玉大社発行、③熊野本宮大社発行。それぞれの神社で購入し、野口が所蔵している護符。